



座談會の中心をなす位ひ、多趣味で、且つ相當豊富な意見も持つてゐた。

同人の集りで酒宴でも開いた時、輪番で何か藝でもやる時は、煙亭さんは禰がけの姿で立ち上つて、「鼻毛の一曲」と云ふのをよくやつた、鼻の穴から一本の長い鼻毛を引き出し、それを立てものにしていろ／＼の藝をやるので、その手つき、その聲、身ぶりなど堂に入つたもので、鼻の上に立たつもりのその鼻毛を、腰を据へて、下座の「かこまやぶ」か何かの地唄につれてのこなしは、正に賣り物になる位ひだつた、あの謹嚴そのものゝやうな煙さんの、日常とは似ても似つかぬ奇聲を發して、豆造もどきの表現は、今でも臉にある、賑やかな地囃子につれて、「鼻毛は元へときやく戻り、ホイ來たい！」と手つき、腰つき、身ぶりもおかし、鼻毛を除々に鼻の穴へ戻すまで、何度見ても涙が出る位い、おかしい藝の持ちぬしてあつた、俳句も、義太夫も、素劇も、決してマツクはなかつたが、蓋し此の鼻毛の一曲ほど、万人をアと云はせるものはなかつたと思ふ、と斯ふ云ふと、地下の故人は怒るかも知れないが、私はそれほどむむさんの鼻毛の一曲を忘れる事は出来ないのである。

(三九) 煙亭即ち塵外、明治時代からの古い俳人であつた。又義太夫の批評家としては古い時代は黒顔子後金王丸の號を使つた。

### 杉山一轉書簡 (はがき)

(表) 東京市本郷區春木町二丁目

六十三番地 朝日館にて

中野準三郎様

堺市甲斐町東二丁目十八番地

杉山 一 二

(裏) 明治三十九年七月二日

拜啓 兎角御無沙汰勝ちにて誠に申譯

字不明) 日は御葉書被下難有奉存候(二

候やら覺東なきも御目にかへ可申候

近日虚碧兩氏當地に御越の由大兄にも

夏休みを利用して御來遊被成候ては如何

に候や夜と共に久々の御物語語可仕切に

望ましく存候

七月一日

(三九) 一轉については書く可きことが甚だ多い、「はがき」は東京で失敗して堺へ歸てからの通信だが堺に歸てからは別人の如く着々堅實な歩みを歩んだのである。

### 新刊紹介

「しま」子規堂落慶特輯號

(愛媛縣伯方町木浦一島)發行所)

松山子規堂落慶式に關する文獻……「子規堂

落慶式に參列して(阿部里雪)子規堂の由來

と變遷並其の目的と活用(柳原極堂)は……

のみづ)號の「子規堂雜泉」「我流」創刊號

の「子規堂後四十五年」と共に永久に保存す

べき文獻である、松山子規堂に於ける極堂

根岸子規堂に於ける鼠骨は適材適所として之

に上越す人物はない、子規堂は既に成り、子

規堂には重修資金募集中だが、こゝには兩ま

の健康にして長壽ならんことを祈念して止ま

ぬ次第である。

病む幹にコールド塗り塗られ櫻の實

さくらんぼ暗みて鴉刺を病みぬ

笑ひ藥の種白粉のと貰ひ蒔きける

素裕や襪白粉の落ち残り

素裕の袂ふら／＼煙草鏡

水にうつる枝垂れ櫻の實に小鳥

電話借りし裕の女笑ひ居り

種まくや三坪の庭に尻端折り

種まくに妙法蓮華固法華

### ひさご會

(一八、一〇、一五)

二三本踏切小屋の隅に蒺藜

石多き畑に育ちてヒマの秋

ヒマの秋官舎の道を狭めけり

村で一番角力功者や水車番

慰門文ヒマの實りも晝かれけり

唐胡麻やレトル錆びたる引込線

猫の子の鳴く蒺藜影や夕の雨

流星の葉に語らずヒマの露欠

ヒマの葉に雲折すやかげり居る

ヒマに降る雨を親しみ籠りけり

ヒマ實る率土の濱の涯までも

人潜りて後道ありぬヒマ畑

待遊塚の掩蓋の土みのるヒマ

通り魔にかくも折られしヒマの幹

ヒマの幹捻ぢり切りたる子を叱る

ヒマ潜る顔に晝の蚊當るなり

高々指と拇指の輪のヒマの幹

三 允

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

同 舟

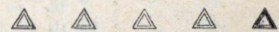
同 舟

同 舟

同 舟



神代からの温泉が止む地震霜酷びし、三允  
 落葉劇し彈丸には勝てぬ怒り猪の  
 猪鍋や幕末江川太郎左衛門  
 猪出たは山崎街道何のあたり  
 大鯨の腹から人の手が爨



# 月如無恨月長圓

# このみづ

## 復興第四號

### 近禽獸 季々庵

人有道、飽食煖衣逸居而無教  
 則近禽獸、聖人有憂之、使契  
 司徒教以人倫、父子有親、君  
 臣有義、夫婦有別、長幼有序、  
 朋友有信。(孟子)

飽食煖衣逸居而  
 無俳諧則近禽獸

向つ峯に遊ぶ猿は栗柿に足らへ  
 飽くさま眼鏡にて見る

# 1947

地番七十五百六千三町家領市口川縣玉埼

## このみづ社

番五〇〇三(口川)話電

上州名物

古稀減一

赤城榛名妙義三山屹然と  
 變らぬ姿今昔  
 日本三古碑多胡の碑や  
 古歌萬葉の徒渡り  
 外史氏曰くの新田氏と  
 氣概高山彦九郎  
 月野夜橋に香煙る  
 其の身礫茂左衛門  
 圓朝安中草三郎  
 青で泣かせる鹽原多助  
 上州無宿國定忠治  
 長脇差の大前田  
 間庭念流矢受けの小太刀  
 高橋お傳悪の華  
 浪子武男の伊香保の蕨  
 氷る榛名湖公魚鉤りに  
 天神峠の砂糖餅

昭和三年二月二十日 印刷納本

昭和三年五月二十日 發行



一度はお田で草津の温泉  
 礎部鏡泉鹽の味  
 下仁田葱の根の深さ  
 日光造り一の宮  
 佐野源左衛門松井田の庄  
 税所新左衛門大室の庄  
 同志社社長新島襄  
 お江戸見たけりや高崎田町  
 高崎子守の小學校  
 前橋縣廳裁判所  
 急ぐ伊勢崎東武線  
 文福茶釜茂林寺や  
 太田吞龍館林  
 躑躅に赤城また聞ゆ  
 俳句で舉れば村上鬼城  
 堀込源太八木節と  
 などなどなどの結末が  
 機で繁昌を歌はれる  
 鼻ア天下に空ッ風  
 利根の水流は清し

百舌鳥

還曆加八

今日一日の運命を豫言する……………  
 ……○……………豫言者としては饒舌に

過る朝の百舌鳥。  
 私は机に身をもたせ、ペン先で  
 爪の垢を堀る。

明減

耳順加九

快活な青年から。  
 重苦しい狂人に變貌する經路を。  
 ドアに錠のかけてある一室に讀む。  
 明減する燐色の文字。  
 朝のラジオのニュースに夜着をかぶり  
 眼を閉ちて居る時の頭の中。

インキ壺の中ペン先に冬の蠅 三允  
 餅の杵肩にしばらく立つ地震  
 若菜野や氷るせゝらぎ音絶えて  
 風邪の妹家に籠らし摘む若菜  
 嬌々の聲若菜野の雪に妹

